



グローバル化される日本

外国人の顔をした日本人

日本列島を感動の渦に巻き込んだ「ラグビーワールドカップ2019」が終わった。振り返ると、大学ラグビーが人気の絶頂にあった1980年代初頭には7万人の観客を動員していた。「魔法のやかん」を持ったスタッフが、フィールドで倒れた「痛んだ選手」に駆け寄っていた頃だ。ところが日本のレベルが世界に遠く及ばないことが知れ渡ると(NZに128点差の大敗,1995)、次第に人気は冷めていく。ブライトンの奇跡(南アに勝利,2015)を経て今なお、日本代表メンバーが属するトップリーグの平均観客数(4千人)はサッカー(J1で2万人,J2で7千人)に遥かに及ばない。だから開催前にこの盛り上がりを予想できた人が少なかったのもうなづける。

日本代表の条件でサッカーは日本国籍を持つ者だが、ラグビーは違う。日本人でも、ニュージーランド代表に入ることができる。

選手31人のなかに15名も外国人がいると否定的なニュアンスの報道もあった。だがこの15名中9名は日本国籍を持っている日本国民だ。

日本人の顔をした外国籍人、顔を持たない国家

このような例は他にもある。日本人のノーベル賞受賞者は27人だと報道される。しかし日本国籍を持つ人なら25人だ(南部陽一郎/中村修二の両氏は受賞時点で米国籍)。ちなみに宇多田ヒカルや草間彌生も米国籍だ。日系二世で民主党上院議員を約50年務めたダニエル・イノウエ氏は第442連隊の英雄であり、米国に忠誠を尽くした。ブラジルには150万人、米国にも120万人の日系人が暮らしている。こういう人たちは日本人の顔をした外国籍の人たちだ。

アメリカ人にアメリカ人とは誰のことか?と質問するなら、米国籍(シチズンシップ)を持っている人という回答が返って来る。米国政府が有事の際に異国に取り残された同胞を救出するとしたら、それは国籍を持っている人(米国民)のことを指す。移民国家は成り立ち上、特定民族の顔を持たず、多民族をルールによってまとめていく。そのルールはシンプルだ。

血統主義(民族性)

フランス人とは「フランス国籍を有する者」であり「民族的出自や宗教的信念を問わない」。ユダヤ人の定義は「母親がユダヤ人もしくはユダヤ教への改宗を認められた者」である。

国籍において出生地主義をとる国(アメリカ/カナダ/イギリス/フランス等)もあれば、血統主義の国(日本/中国/韓国/北欧諸国等)もある。したがって日本人の定義は次のようになる。

- ① 日本国籍を有する日本国民
- ② 日本列島に起源を持つ民族集団

だが日本民族とは誰だろう?「出生の時に父又は母が日本国民である」なら日本国籍を得られる。政府は日系人に対し特別の日本在留資格を与えている。島国だが、単一民族国家ではない。旧石器時代に渡来してきた者の子孫だけが日本民族ではない。異なるルーツを持った古代人が日本列島に住み着いて共存し、何十万年もかけて混じり、日本人が生まれ、再び混じりながら日本人を再生産しているというのが事実だ。

"I AM AUSTRALIAN"

豪州の大きなスポーツイベントなどで親しまれている曲のタイトルがこれだ。The Seekersの歌が有名で、歌詞はこうなっている。

4万年前から住む者(アボリジニ)が最初のオーストラリア人。囚人船で来た者、入植者、農夫の妻、受刑から開放された者、鉱夫(出身の兵士)の娘、大恐慌を生き延びた者の子、田舎者、逆境にめげない人。そして、美しいハーモニーがこう奏でられる。(作詞 Bruce Woodley, Dobe Newton)

We are one, but we are many
And from all the lands on earth we come
We'll share a dream and sing with one voice
"I am, you are, we are Australian"

グローバル化されるとは、こういうことではないだろうか。多様性とは寛容性であり、グローバル化とは夢を共有して声をひとつに歌うことだ。私たちはひとつ、だけど私たちはいろいろ。地球のあらゆるところからやって来る。

(波野雅告)